

日本神経学会代表理事就任のご挨拶

西山和利

日本神経学会代表理事
北里大学医学部脳神経内科学主任教授

2022年5月に東京で開催されました第63回日本神経学会学術大会終了後より、任期満了に伴う戸田達史前代表理事の御退任に伴い、第10代の日本神経学会代表理事に就任いたしました西山和利と申します。本稿を認めているのは2022年7月の新しい理事・監事メンバーでの最初の理事会を終えた驟雨のみぎりでございます。7月上旬には日本神経学会ホームページに代表理事としてのご挨拶を掲載させていただきました。これと重複する内容もございますが、臨床神経学の読者でいらっしゃる日本神経学会の会員の皆様にも一言ご挨拶申し上げたいと思います。

日本神経学会は、1960年の第1回「日本臨床神経学会」総会開催をもってその水端とし、我々の慣れ親しんだ「日本神経学会」の呼称は1963年の改称以来使用されています。しかし本邦における神経学の嚆矢は1902年創立の「日本神経學會」であるとも仄聞しております。即ち日本の神経学は1902年以来120年もの長い歴史を有しているわけです。そしてご存じの通り本邦における近年の神経学の長足の進歩には日本神経学会の諸先輩方が大きな役割を果たして参りました。この度このような歴史と伝統のある学会を代表する立場を拝命しましたことは誠に名誉なことと存じておりますが、同時に本学会の創生から発展の歴史を学びなおし、錚々たる先達の先生方の御名前を拝見いたしますと、その重責に身が引き締まる思いでもございます。

沖中重雄初代理事長から戸田達史第9代代表理事まで歴代の代表理事/理事長のご指導の下、日本神経学会は着実な成長を遂げ、大輪の花を咲かせることに成功しております。理事長の呼称が代表理事と変わった葛原茂樹第6代代表理事の時代、そして水澤英洋第7代代表理事の時代に当学会は一般社団法人化を成し遂げ、学会の代議員、理事、そして代表理事は選挙で選ばれるという現代に相応しい新しい体制を構築いたしました。高橋良輔第8代代表理事ならびに戸田達史第9代代表理事の在任期間は、新専門医制度への対応、ならびに専門医制度上の基本領域化を目指して様々努力してきた激動の時代であったと言えます。私は2014年以降、水澤先生、高橋先生、戸田先生の3名の代表理事の時代に総務幹事として学会の様々な分野を学ばせていただきました。私は代表理事に就任するにあたり、これまでの当学会の発展と努力の歴史を学びなおしてみました。目覚ましい成功を遂げている分野においてはその速度を落とすことなく更に邁進していく所存でございます。一方で、いまだに当学会に対する国民からの認知度は低く、脳神経内科領域の十分な医療提供ができていない地域や分野も少なくないことも存じております。即ち国民からの大きな期待が日本神経学会へと向けられているわけです。また、進化し続ける新たな専門医制度への対応、コロナ禍での学会運営、地域間格差の解消、学会が内包する多様性への対処、など当学会を構成する脳神経内科医の皆様が学会に対策を期待する課題も日々増加の一途をたどっていることも認識しております。このような目前の課題に対しては適切な迅速さをもって解決に取り組みたいと考えております。

新しい理事会の方針の詳細をすべてお伝えするには紙面が足りませんが、今後2年間の任期における当学会の主要な運営方針の中から代表的な8項目につきまして私の考える処の概要をお伝えしたいと存じます。

・学術面での更なる飛躍，神経疾患克服への研究支援

未だに有効な治療法が存在しない脳神経内科疾患は多数存在しています。日本神経学会ではこうした未だ根治できない疾患に対する将来の治療を視野に入れた挑戦的な研究シーズへの支援を積極的に行ってきました。また昨今はそうした translational research を担う若い脳神経内科医の育成にも力を入れて参りました。今後も休むことなくこうした努力を続けて参る所存です。このような投資はすぐには華々しい結果は生み出さないかもしれませんが、長期的には本邦における神経疾患克服の礎になるものと期待しています。

・国際化の推進

これまでの日本神経学会は、国内のみならず世界からも尊敬される立場を目指して日夜努力を続けて参りました。これからも American Academy of Neurology や European Academy of Neurology といった世界的な学会と比肩できる立場を目標として、またアジアの神経学の盟主を目指して参りたいと考えております。海外からの入会の簡便化、当学会の英文ホームページの拡充、海外主要学会との交流の拡大、などを通じて、今後も更なる国際化を推進して参る所存です。

・国民に広く認知される神経学会を目指す広報活動

日本神経学会は数多くの脳神経内科医を擁し、これまでも国民の健康福祉のために心血を注いで参りました。しかし未だに国民からの当学会の認知度は低いのが現状です。精神神経科や脳神経外科を知らない国民は皆無でしょうが、脳神経内科を知っている国民は未だに限定的です。医学部に入学する学生ですら入学時には脳神経内科の存在を知らない者が多数いるのが現状です。今後の日本神経学会は、社会に広く認知される神経学会、国民から頼られる神経学会を目指して今まで以上に効果的な広報活動を展開していく必要があります。私も 2016 年からの 4 年間は広報委員会委員長を務めさせていただきましたが、近年の当学会は医学生や研修医への広報活動に尽力して参りました。今後は脳神経内科医を広く一般国民に知っていただくための広報活動にも努めて参る所存です。

・ Common disease を含め脳神経内科医の活躍の場を拡張する努力

脳卒中、認知症、頭痛、てんかん、などのように国民の多くが苦しんでいる脳神経内科領域の common disease の診療や研究に取り組む脳神経内科医はこれまでも多数存在しました。私自身も common disease を自らの専門の一つとしております。しかしこうした分野における脳神経内科医の活躍が十分に国民に知られているとは言えないのが現状です。また common disease の分野では当学会が国民に十分満足いただけるだけの医療体制を提供できていない地域も存在します。国民の多数が苦しんでいるこうした common disease は当学会が早急に取り組むべき課題であると認識しております。Common disease を診る脳神経内科医を積極的に育成し支援することを学会方針の一つに挙げたいと思います。

・「社会の中の神経学会」 / 国民の期待に応える学会運営

日本神経学会はそれ単体で存在しているわけではありません。日本神経学会の最大の存在意義は国民の負託に応えることであると私は考えています。そのことから、今期の理事会では「社会の中の神経学会」を意識した学会運営を考えたいと思います。様々な学会活動を通じて国民からの当学会への御要望を汲み上げ、国民の期待に応えることが出来るような学会運営に尽力したいと思います。

・次世代を担う脳神経内科医の育成

この原稿を執筆している時点での日本神経学会の正会員数は 9,560 名です。最近では 1 年間に 400 名を超える入会者がある年度もあり、そして直近の 5 年では約 1,000 名もの会員数増加を認めています。これは当学会が推進してきた広報活動ならびに勧誘活動の成果を示すものでありますが、同時に国民からの当学会への大きな期待の表れであるとも考えられます。しかし国民からの脳神経内科医への期待に応えるには現在の当学会の会員数では十分ではありません。更に多くの若者に脳神経内科医という進路を選択していただ

るよう、学会が一丸となって次世代を担う脳神経内科医を育成するべく努力を続ける必要があると考えております。

・脳神経内科医の生活を守る神経学会

若者が安心して脳神経内科医という進路を選択できるように社会環境を整えることも大切です。即ち日本神経学会は脳神経内科医の生活を守るための施策もしっかり考える必要があるのだと認識しております。そのためには多方面への広報、発信も必要でしょう。また様々なキャリアパスの脳神経内科医が恙なく活躍できるように支援体制を構築していくことも肝要です。特に臨床医として当学会を支援してくださっている数多くの脳神経内科医の生活を守るための学会運営を心がけたいと思います。新たな組織として臨床医部会を発足させることも一つの案として検討して参る所存です。

・「みんなの神経学会」 / 多様性を重んじる学会運営

脳神経内科医には様々な働き方や専門性が存在し、神経学会の内在する多様性はきわめて広範です。脳神経内科疾患を専門に扱う専門医、神経系診療にも長けた内科医、神経内科専門医資格を有する総合診療医、神経難病に寄り添う在宅診療医、いまだ治療法がない脳神経内科疾患の克服を目指して研究する医学研究者、脳卒中の急性期治療に特化した診療をする stroke neurologist、頭痛や認知症など common disease を診る開業医、神経系 ICU に勤務する neuro-intensivist、企業や官公庁で働く脳神経内科医、など様々な働き方が存在します。これらはすべて脳神経内科医の確立したキャリアパスなのです。しかし、このような多様性は、学会の運営方針次第では分断と排斥につながりかねません。私はこうした多様性を当学会の最大の特長のひとつであると考え、前向きに育んでいく所存です。臨床の現場を支えてくださっている脳神経内科医は、これまでの当学会ではともすると過小評価されていたのかもしれませんが。しかし私は脳神経内科の臨床医こそが当学会の根幹であり、最も称賛されるべき英雄であると考えています。こうした地道な貢献をされている会員にも光があたるような学会でありたいと考えております。

そこで、今期の理事会では「みんなの神経学会」をテーマに掲げ、脳神経内科医がお互いの多様性を尊重する姿勢を醸成したいと思います。またすべての脳神経内科医に愛される学会になれるよう、人間味あふれる学会運営を心がけたいと考えております。

これから2年間の任期が始まります。私は浅学非才な身ではございますが、上に述べましたような多くの課題を深く認識し、身命を賭して当学会の発展のために精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

2022年7月吉日

西山 和利